

地図帳から自分の住む地域を読み取る

愛知教育大学助教授 寺本 潔

1. 地図帳は身近な地域の学習には不適か？

中学校学習指導要領の内容「(2)地域の規模に応じた調査」の「ア」、には次のような一文で地域調査の必要性が述べられている。「身近な地域における諸事象を取り上げ、観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる。」

この記述をまともに受けとめれば、身近な地域の指導には、県や国といった規模の地図が綴られている地図帳はとりたてて活用しなくてもいいようにも思える。

だが、目の前で観察している事象についても、例えば「学校の前の国道はとてもトラックの通行が多いな」「ナンバーを見れば、隣の県の都市名や東京の品川ナンバーが読み取れるな」といった場合には、地図帳をひもとく必要がでてくる。なぜなら、観察した事象はトラックといった単に個別の事象にすぎないが、そのトラックが日夜、東京市場と生産地を結び流通の役目をはたしていることがうかがわれるからである。

学習指導要領の中の「市町村規模の地域的特色」の一端にもこういった視点は欠かせないはずである。学校の前の国道は地域的特色の一端を示す流通路にあたり、身近な地域はトラック輸送の通過点にあたる。ひょっとすると近所の工場や農協からも製品や特産品が東京市場に輸送・出荷されているかもしれない。こういった機能（結節）、**地域的な見方や圏構造をもった物流の経済圏**といったとらえ方はこれからの社会科にとってきわめてたいせつな見方・考え方なのである。

2. 福岡市を事例にして

読者の先生方にとっては、必ずしも身近な市ではないかもしれないが、福岡市の中学校という設定で地図帳から生徒の住む地域を読み取らせる場合の指導の留意点について述べてみたい。

(1) 基本図で福岡市の位置を確かめる

身近な地域の観察調査とはいっても、先にあげたトラックの例のように他地域との関係で地域的特色は成り立っているのも、広域が理解できる基本図で読み取らせる指導もたいせつである。これは地域調査に出かける前でも、出かけた後でもいい。広い視野に立って自分の住む地域を眺めてほしいものである。

帝国書院版の『新編中学校社会科地図』（最新版）にはp56～59に見開きで日本列島の300万分の1縮尺の基本図が掲載されている。これを使って、例えば「福岡市－東京間の距離を計ってみよう」「福岡の特産品がトラックで東京に運ばれているようすを想像してみよう」「高速道路を使って走れば何時間くらいで東京に運ぶことができるのだろうか」「学校の前の国道にも東京行きのトラックが走っているかもしれないね」などと補足して、**目の前で観察できる社会事象を国土の基本図の上でワイドに把握させる指導の手立て**をおすすめしたい。

物流だけではない。福岡市には会社の支店が多く立地している。生徒の父親の職場が中央資本の会社の福岡支店に勤務している場合などでは、身近な地域の学習の中で容易に人の移動や交流がみえてくる。さいわい地図帳にはp.56の下に「③時間距離からみた日本列島」の主題図が入っており、福岡市が東京と意外に時間距離的にはそれほど遠くない事実を知ることができる。こうした地図帳の読み取りを通して、

わたしたちの市には他地域との経済や人の結びつきが感じられる事象が身近にある

という事実をしっかりと知ることができる。

さらに、おもしろい学習がある。福岡市の地下鉄の車内や構内、公共的な施設の周辺には、結構ハングル文字の案内を眼にすることができる。韓国との密接なつながりを福岡では感じる事ができる。

基本図には下関ーブサン間が228kmと赤い航路線が記入されており、福岡空港からも韓国や中国大陸、東南アジアの各国に多くの便が着発しているの、福岡市と近隣諸国との地理的な関係を、日本周辺の基本図でも確かめさせることができる。このことはp.55の「⑤日本の航空路」と題した図でもはっきりと示されており、生徒にとっては「いつも中学校の上空を飛んでいる外国の航空会社の飛行機は、そういった結びつきを示しているんだ」と観察している事象と学習内容とがぴったりと合さり、臨場感を抱いて社会科授業に臨むきっかけともなるのである。

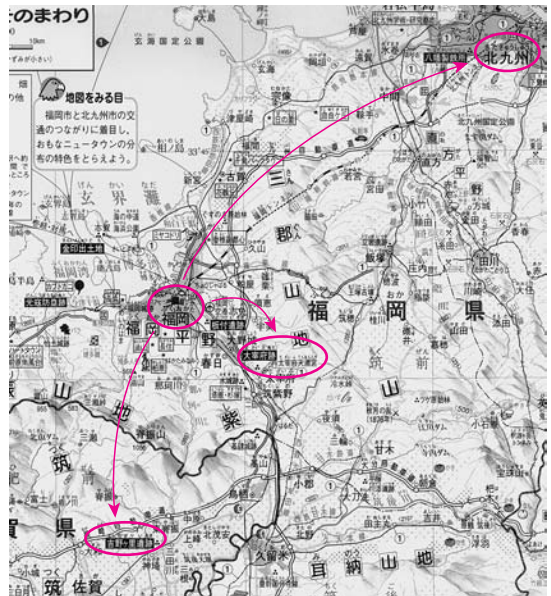
(2) 拡大図から自分たちの住む地域の地理的構造を類推するー“鳥の目”と“虫の目”を育てるー身近な地域の学習に最適なスケールといえ、やはり拡大図。地図帳のp.65には「①福岡県とそのまわり」という拡大図が掲載されている。50万分の1縮尺であるので、図上で1cmが5kmで表示される。この程度の距離ならば、地域での実体験との照合が可能になるだろう。

例えば福岡市に住む中学生にとって、親戚の住む北九州市に電車で行った経験が地図を読む際に実感的な印象を与えてくれる。正月に初もうでで、福岡市の南東10kmにある太宰府に行ったこと、高速道路で佐賀県の吉野ヶ里遺跡を見学に行ったことなども地図上で確認できる。

このように身近な地域での人々の行動の蓄積が暮らしになっているので、拡大図程度のスケールは暮らしを反映しているといえる。高規格道路や高速道路、鉄道網の発達で今や生徒の行動圏は拡大を続けており、「鳥の目」をもった生徒をこの学習でも育成する必要があるからだ。

もちろん、国土地理院発行の2万5千分の1の縮尺の地図や1万分の1の縮尺の都市図などを活用し、身近な地形や土地利用、農家や店舗、工場などの点的な事象をていねいに歩きながら観察させる「虫の目」も育てたい視点である。

しかし、たとえ個別の要素でも必ず他の地域や他の要素との関係が隠されているので、身近な地域での観察・調査はそれだけ奥が深いというわけである。要は、鳥の目と虫の目の複眼的視点こそ地理でつちかいたい能力なのである。



帝国書院『中学校社会科地図（最新版）』p.65

(3) 資料図を活用する

福岡市の場合、p.66に「③福岡中心部」という資料図が掲載されている。10万分の1の縮尺なので、1cmが1kmとさらに実感的なスケールになっている。この図には、面白いことに各国領事館の位置や博多湾の部分にパイグラフで「福岡空港から入国した外国人の割合ー1999年ー」という統計図が付記されている。これらを活用し、「福岡市にはどこの国の領事館が多いのだろうか」「博多湾には外国とのつながりを目的にしたどういった施設が作られているか」「福岡空港を利用して日本にやってくる外国人の地域的特色は何か」といった質問をなげかけることで学習が深まりをもつに違いない。

身近な地域の学習でこういった地域の特徴を学ぶことは地域が直接外国と結びついているという現代的なテーマに接近できることにもなる。



帝国書院『中学校社会科地図（最新版）』p.66